人麿短歌の一発想

――巻三253における隠妻伝説との関連――

都倉義孝

一

人麿が古事記的神話世界を摂取したり、また呪詞等を模範とすることで、長歌のあの荘重な修辞や構成を獲得したことは、既に多くの研究の認める所となっている。そして右の事実等から、人麿は持統三年六月に設置された撰善言司に何らかの関係があったとか、旧辞の伝誦者、稗田阿礼とも知己の間柄であったなどと云われている。こうした推測がどの程度信じ得るかはともかくとしても、とにかくこうした推測が可能なほど、人麿の長歌には先行文芸の影響が濃厚なことは卒直に認め得るところである。このように人麿の長歌と先行文芸の関係は形式内容ともに様々な角度から検討が加えられているのであるが、一方の短歌における先行文芸との関係は意外なほど閑却されているようである。それというのも、長歌ではよく云われるように、叙事的部分と抒情的部分に見られる主題の分裂また構成の破綻等の目に付き易い考究の手掛りがある。つまりその分裂、破綻が生じた原因とかそれを強いた条件等を考えると、そこには儀式、信仰に強く依存している呪詞の類からの消化し切れない摂取、影響が必然的に摘出される。人麿の長歌にはそうした表面的手掛りがあるわけだが、人麿の短歌は完成された抒情世界を形成しており（短歌形式そのおのが既に完結した自己世界を指向している故でもあるが）、五七五七七という音数形式を除いては、先行文芸の明瞭な根跡を認めることは容易ではないようである。

しかし人麿の短歌と云えども、文学の流れの中に何の母胎もなしに出現したとは考えられない。形式においては、たとえば短歌が長歌の結尾の繰り返しから生じたというように、内容の面、抒情の質においても先行文芸から何らかの摂取と転生が行われているのではないかと思われるのである。そして、この面から抒情詩の形成過程を探ると、芸謡・挽歌・恋歌といった系列が窺えるのであり、既にいくつかの考究が試みられ成果を挙げている。右の諸過程は濃淡の差はあれ、全て人麿の短歌の中に認めることが出来るのであるが、他に見逃し難い先行文芸の影響の一面があるのではないかと思われる。それは物語世界の影響である。

記紀に伝わる多くの物語が、旧記定着以前において様々な享受

の場で語られ演ぜられ、それが多くの人々に身に泌みる情緒を味わわせ、その甘美さを覚えさせたということは確かなことであろう。それ故に物語の聴き手が消極的にこれを受け取っているだけではなく、次第に積極的に物語世界に参加しようという意欲が生まれてくる。この傾向が書紀の時人の歌またそれに類する記紀歌謡のいくつかに見られる。万葉の有馬皇子や松浦河等の後人追和はこの系列に属するものである。また一方では、物語中の主人公の詠唱が背後にその物語の筋や情緒を匂わせることへの興味がつのり、進んで歌の連続をもって物語世界を形作ろうという傾向もあった。たとえば巻二の磐姫の歌、大津皇子に関した歌共、巻十五の中臣宅守と狭野弟上娘子の歌等である。以上二つの傾向は、歌の側から見ればいずれも物語的情緒を取り入れ、物語的筋を背後に想像させるという方法であった。

このように短歌の領域においても、人麿とは方法が異なりはするが、物語との交渉を持ち、その影響を受けた例がある。このことなどからも彼の短歌にも伝承された多くの物語との交渉が認められるのではないかと推測される。しかし、人麿の短歌は露骨にその影響を見せているのではない。時人の歌、後人追和は単に物語に対する感想を述べるだけで、物語に依存しその一部に過ぎない。これに反して人麿は、例えば「過近江荒都時」の反歌でも知られるように、懐古という方法で事件（この場合は壬申の乱であるが、彼が天智・天武の時代を全て「古（いにしえ）」と呼んでいるように、彼にとってそれは事件というよりは悲しい情緒に彩られた物語と云ってさしつかえなかろう。）に纏る情緒を自己の時点において抒情として消化吸収している。彼は物語世界をひとつの発想の契機として活用していると云えよう。

そこで人麿の短歌と物語世界の交渉の一例として、巻三の「羇旅歌八首」の内の左に掲げる一首を考えて見たい。

253 稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき可古の島見ゆ

一に云ふ、湖見ゆ

稲日野毛去過勝尒思有者心恋敷可古能嶋所見一云湖見

右の歌は播磨国風土記に見える隠妻（なばづま）伝説を踏まえ、その上に自己の抒情を形成しているのである。隠妻伝説は同風土記賀古郡と印南郡の条にあるが、それはこの話の「南毗都麻」という島が丁度両郡の境となる賀古川の河口にあった故であろう。この「稲日野」を舞台にした物語というのは次の如くである。

一、播磨国風土記賀古郡の条

昔、大帯日子命、印南の別嬢を誂ひたまひし時、……印南の別嬢、聞きて驚き畏み、即て南毗都麻嶋に遁げ度りき。こゝに、天皇、乃ち賀古の松原に到りて、覓ぎ訪ひたまひき。こゝに、白き犬、海に向きて長く吠えぬ。天皇、問はしたまはく、「是は誰が犬ぞ」と問はしたまふに、須受武良首、対へてまをさく、「是は別嬢が養へる犬なり」とまをす。……乃ち、天皇、此の少嶋に在ることを知りまして、即て度らむと欲したまひき。……遂に度りて相遇ひたまひ、勅して「此の嶋の隠愛妻」とのりたまひき。仍りて南毗都麻と号く。……又、城宮に遷り、仍ち始めて昏を成したまひき。……年ありて、別嬢此の宮に薨りまししかば、即て墓を日岡に作りて葬りまつりき。其の尸を興げ

て、印南川を度る時、大き飄、川下より来て、其の尸を川中に纏き入れき。求むれども得ず。但、匣と褶とを得つ。即ち、此の二つの物を以ちて其の墓に葬りき。故、褶墓と号く。こゝに天皇、恋ひ悲しみて、誓ひたまひしく、「此の川の物を食はじ」とのりたまひき。

二、同風土記印南郡の条

印南の別嬢、此の女の端正しきこと、当時に秀れたりき。その時、大帯日子の天皇、此の女に娶はむと欲して、下り幸行しき、別嬢聞きて、即ち、件の嶋へ遁げ度りて隠び居りき。故、南毗都麻といふ。

右の話が景行天皇や吉備の臣に関係していることは、そこに意図するところがあったと当然考えられるが、一応それは別として、人々に与えた印象は一篇の愛情物語であったと云えよう。

人麿の「稲日野も」の歌はこの隠妻伝説を踏まえていると考えられる。播磨国風土記と万葉との関係は天智天皇の三山歌の例があり、この地方の伝説が万葉歌人の頭の中にあったことが知られる。故に人麿の「稲日野も」の歌と同じ播磨地方の隠妻伝説の関係を想像してもあながち荒唐無稽ではなかろう。万葉の歌人達の間に、また人麿が生きた持統文武朝においてこうした地方の物語が伝来され知られていたということは充分可能である。ではこの印南の別嬢にまつわる物語がどのように人麿の歌の発想を媒介しているか、人麿はどのように発想の契機として利用し、その情緒を自己のものとして消化しているかを考えてみたい。

二

先ず「イナビノ」または「イナミノ」（以後個々の歌を離れた概念として使用する場合は印南野と記す。）を人麿以外の万葉の歌人達がどのように扱っているかの問題から始めたい。万葉には人麿のこの歌を除いて印南野が六例あるが、例えば

940 印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くあれば家し偲はゆ

を見ると、「印南野」は家郷をしのぶ景物として用いられている。勿論「家し偲はゆ」の原因は「さ寝る夜の日長くあれば」であるが、それだけでは「印南野」はその他の他の野に置き換えることが出来る無意味な添え物にすぎない。地名は歌の主題にとって不可欠のものである。従ってこの「印南野」も何らかの意味で「家し偲はゆ」と関係があらねばならない。即ち「印南野」自体にも「家し偲はゆ」を導き出す要素があると考えられる。更に次の歌では、「稲日野」は親しい女性の身の上へ思いを寄せる際の景物として使用されている。

1772 後れ居てわれはや恋ひむ稲日野の秋萩見つつ去なむ子ゆゑに

この歌は詞書に問題があるが、年代的には一応人麿以後に位置せしめることが出来よう。(注1) これは京に残った人が知人の筑紫へ下る道中を思いやったものであるが、その道中の野は何も印南野に限ったものではないのに印南野が選ばれているのである。そこには何らかの原因があったと考えざるを得ない。印南野という言葉には恋しい女性の身の上へ思いをかりたてる要素があり、そのことが印南野を恋情に結びつけていると見られる。それは印南野と

云えば直ちにかの隠妻伝説＝「いとしい妻を恋ふる」物語が想起された故である。しかし印南野の用例には、家郷や妻を恋うる際の景物として使用されているだけではなく、単に地名としてのみ用いられている例もある。であるが、例えば次の歌でも、やはり印南野には万葉人の心を誘う情趣があったと云えよう。

1179 家にしてわれは恋ひむな印南野の浅茅が上に照りし月夜を

右の歌では印南野が選ばれた原因として、印南野がさまざまな感懐（それは懐古の情、家郷や妻を偲ぶ情などであろうか、）を作者にもよおさせたことが考えられる。そうした感懐を万葉の歌人達にもよおさせる由来が印南野にあったのであろう。この歌では、印南野の月夜が万感を誘った故にその月夜を懐しんでいるのである。印南野は彼等の間では人口に膾炙された名所となっていたのである。それは天智天皇の三山歌の妻争いの伝説によるものであろうが、(注2) 印南野が全て妻恋や妻の居る家郷を偲ぶ情につながる点から、それは特に隠妻伝説の由来によるものであったと考えざるを得ない。このことは「イナビヅマ」（または「イナミヅマ」）の用例にあたってみると更に明瞭である。

集中の印南都麻は三例であるが、その全てが妻や愛人への慕情を述べる際に用いられている。これは印南都麻の中に妻という言葉が含まれているので当然すぎることである。言葉の上だけでも妻を恋うる情へ結びつき得るので、このことだけでは隠妻伝説の内容までがそこに関与しているとは判断出来ない。また印南都麻の次の言葉への掛り方を見ると、「稲日都麻浦廻を過ぎて」（509）とか「印南端辛荷の島の」（942）の如くであって、それぞれ「否み妻恨み」「否み妻辛し」という意味を掛けている。(注3) それは一見、景行天皇の行幸を聞いて逃げ隠れた印南別嬢の行動を踏まえ、恋しく思って出かけたのに逃げ出した妻を恨むといっているように思われるのである。しかし、それとても「印南」が「辞み」＝「否み」に通ずるからである。このことから隠妻伝説が忘れられてしまっていても、地名の上だけでも印南は歌の中で充分役目を果していると云える。従ってこの点からだけでは万葉の歌人達がこの伝説を知っていたとは云い得ないのである。だが遣新羅使の歌

3596 吾妹子が形見に見むを印南都麻白波高み外にかも見む

の「印南都麻」はこの隠妻伝説によるものと解さねばならない。この「吾妹子が形見に見むを」の句に対して従来の諸説は全て「いとしい自分の妻の思い出として妻という名をもつ印南都麻を見ようものを」といった類の解を加えている。ただ古典大系の頭注のみ「この歌に妹の形見に見ようとあるのは、ツマという語と風土記の説話とによるものであろう。」と述べて、隠妻伝説が介在していることを指摘している。(注4) これは首肯される評であるが、風土記の説話によるという点を一層強調すべきではなかろうか。勿論、「印南都麻」のツマが作者の妻を思い出させていることは否定出来ないが、この歌ではその事は余情として字句外に伏せられている。表面はあくまで隠妻伝説の故事に惹かれて望見しようとした気持ちである。そして「外にかも見む」といった時には、「隠愛妻」によって喚起された家郷の妻への懐しみ故に一層見たかったのに残念だ、という気持ちが加わってきているのである。何故ならば、「吾妹子」というのは作者の妻を直接指したのでは

なく、隠妻伝説の主人公印南の別嬢であると考えられるからなのである。「何々を誰某の形見として」ということは、形見とされるその品物なり場所なりが偲ばれる人物と直接の関係にあったことを示している。つまり偲ばれる人物が自ら手にした物とか、行った場所等でなければ「形見」と呼ぶことは出来ないのである。この例外は集中には一例もない。(注5) 故にこの場合「形見」といわれる「印南都麻」と直接の関係にあった「吾妹子」は、伝説の主人公印南の別嬢と考える他はない。形見が偲ばれる人物と直接の関係にあることを考慮したのであろうか。略解はこの歌を詠んだ遣新羅使は印南が故郷であって、そこに妻を残しているかのように合理的に解そうとしている。(注6) しかし、よしんばこの天平八年六月の何人かの遣新羅使の一人が印南の出身であって、妻をそこに残して来ていたとしても、そうした一個人の特種な事情が広い享受の場を要求されている歌の発想の基盤となり得るとは到底考えられない。こうした歌の享受の場には、その場を形成する作者の属した階層の人々に共通の文学的素養（全員が知っている歌とか物語とか）、或いは感情が基盤としてあった筈である。その基盤の上に発想してこそ理解可能となる。この歌が必要とした文学的素養・基盤は印南都麻にまつわる隠妻伝説とそれに喚起された京に残した妻への思いと考える他はない。このことからも「吾妹子」は第一に印南別嬢であり、そこに妻が重層してくるのである。伝説上の女主人公を「吾妹」或いは「吾妹子」と称した例は巻九の虫麿作といわれる「周淮の珠名娘子を詠む」(1738) という歌や「菟原処女の墓を見る」(1809) という歌に見られる。虫麿さらには福麿のような官人が地方の伝説を心にとめてこのように歌に詠んだことから、彼等と同じ階層に属する遣新羅使の一人が、異国へ赴くわびしい旅の途中で、家郷に残した妻への思いを託して隠妻伝説を歌に詠むことは充分在り得ることではなかろうか。

この「吾妹子が形見に見む」の歌から隠妻伝説が宮廷人士の間で文学的知識となっていたことが知られるのである。そして遣新羅使の一行が誦詠した歌の中に多くの人麿の羇旅歌のくずれのあることを考え合せると、この歌の印南都麻にも人麿の影響があるのではないかと推測される。人麿が印南野を羇旅歌に取り上げたことの巧みさ、目新しさ、面白さが彼等を惹きつけたと云えよう。これは印南野・印南都麻を使用した歌人達全てに云えることである。それは制作年代の上から検しても、三山歌を除けば、印南野を詠んだのは人麿が最初であるからだ。

さて万葉の印南野の用例に何らかの意味で隠妻伝説の介在が認められること、更に巻十五の遣新羅使の数首の歌が人麿の影響下にあること、隠妻伝説を詠み込んでいること等から逆推して、人麿の「稲日野も行き過ぎかてに」の歌にも印南の別嬢にまつわる故事の追憶があったと認められるのではなかろうか。

三

以上の如く考えると、「稲日野も行き過ぎかてに思へれば」というのは、従来考えられてきたように『景色がよいので心惹かれて行き過ぎあえずに思っている』とか、『野が広いので舟足の遅々として進まないのを歎きながらもの思いにふけっている』とか

ではなく、(注7)『稲日野を見るとあの印南の別嬢の隠妻の話が心に迫ってくる。それにつけても家郷に残してきた妻の身上へも思いは馳せるので、なんとはなし心惹かれて通り過ぎてしまいたくないように思っている』とでも解するのが妥当と思われる。

「行き過ぎかてに」の原因を『勝景を賞でるのあまり』と考えるのは、契沖が何の根拠もなしに云い出したことを、そのまま受けているに過ぎず、訂正されるべきであろう。反証の第一は、勝景を賞でる歌においてはその地が、例えば吉野のように離宮があり、足繁く行幸したことが明白な事実として認められるような地でない限り、その勝れた景色を簡単にではあるが説明することが多いようである。そうしないと聴く者に納得されなかったに違いない。(注8)人麿の「稲日野も」の歌は印南野を詠んだ最初でありながら猶そうした説明の手続きを踏んでいない。また印南野に関しては、風景がよいと解して良いだけの根拠となる記事がない。神亀三年秋九月の聖武帝の印南野の行幸をうながしたものも人麿の歌その他による文学的感興であったろう。従って、「行き過ぎかてに」の原因を勝景と解することは不可能である。第二は、「……かてに」即ち「……をすることが出来かねて」という可能の動詞十打消の助動詞の用い方にある。例えば「……何時しかも　この夜あけむと　さもらふに　眠の寝かてねば……」(388)「……降る雪の千重につめこそ我立ちかてね」(4234)に見られるように、自然条件等の他発的原因によって或る行動が不可能な場合には、その原因を右のように「……なので……しがたい」とはっきり呈示している。この例外はないようである。説明を省略すると聴く者に納得されなかったのであろう。それ故に風光の美しさに惹かれて行き過ぎ難い場合には何らかの説明を要する筈である。これに反して「一日には千たび参りし東の大き御門を入りかてぬかも」(日並皇子の舎人等の歌186)「筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎかてに息づく君を率寝てやらさね」(東歌3388)のように、人事に関した感情が原因となって或る行為が不可能である場合は、その原因を省略することがあり得る。(勿論この場合においても省略されていないものも多いが。)こうした理由が省略されるのは聴く者が、その理由を当然のこととして言葉の背後に容易に想像出来たからであろうその歌の享受の場を形成している人々に共通する人事にからんだ感情が介在している故に省略し得るのである。集中に「かてぬ」は約四十例あるが、この分類はほぼ適用出来る。(注9)

以上の判断によれば、人麿の「稲日野も行き過ぎかてに」にはやはり人事に関した感情が含まれているとせざるを得ない。それは隠妻伝説によって喚起された家郷に残した妻への思いである。(注10)そして『印南野が広いので舟足が遅々として進まずなかなか行き過ぎ得ない』との解もまた否定される。右の解では、『印南野が広い』ということは自然の条件(他発的)であり、それが「行き過ぎかてに」の原因となっているのである。このような理由によって或る行動が不可能な場合は、前述のように例外なくその原因に言及しているが、この歌では印南野が広いことなど一言も触れていない。その上、印南野が広いとする解は客観的なようで甚だ主観的である。万葉の歌人達が印南野を広いと思っていたとすべき確たる証拠は皆無である。その上、印南野と云っても、風土記

によれば加古川西岸の地と考えられるし、続日本紀天平神護元年五月の条に「播磨国賀古郡印南野」とあるのを見ると加古川東岸の地とも思われる、といった具合に混乱しているので猶のことである。広いとしてもそれが直ちに舟行困難(舟旅の退屈)となるのは飛躍があり過ぎよう。更に、人麿が「行き過ぎかてに思へれば」と云っているように、「行き過ぎあえず」は「思う」という作者の主観の内容となっている。即ち行き過ぎ難い気持ちになっていることなのである。「思う」は心の動きである。『印南野が広いので舟がなかなか過ぎることが出来ない』といった類の現実的体験や現象は「思う」という主観の対象ではない。この「行き過ぎかてに」は隠妻伝説を追憶し、妻まで懐しく思われるので行き過ぎ難いのである。

「行き過ぎかてに」が舟行の困難を意味しながら、「思う」の対象となるのに矛盾を感じたのであろうか、斎藤茂吉は「行き過ぎかてに」で一応意味が切れて、改めて「思へれば」と続くのだと、この二句を意味の上で全く別の内容を持つものとしてしまった。(注11) しかし「行き過ぎかてに」と「思へれば」は、集中の用例を検すれば、そのように恣意的に切り離すことが出来ないのである。茂吉の考え方は論外である。印南野によって引き起された作者の、人事にからむ感情が「行き過ぎかてに思へれば」の原因、内容と考えざるを得ない。

「行き過ぎかてに」を舟行の困難と見るのは以上のように無理な考え方であるが、その考え方はまた「心恋しき可古の島見ゆ一に云ふ湖見ゆ」の句を合理的に解そうとすることにも遠因があると思われる。つまり『舟旅に退屈して、もの思いにふけっていると待ち望んでいた陸地、上陸して休むことの出来る可古の舟泊りが見えて来た。』という意味で続けたいからなのである。そこでこの「心恋しき可古の島」についても考える必要があろう。

四

万葉の「一に云ふ」の性格はいろいろあろうが、この「可古の湖見ゆ」は、「可古の島」では「心恋しき」の内容が理解出来なかった後人(巻三の編纂者・校訂者でもあったろうか)の賢(さかしら)ではないかと考えられる。「可古の湖」とすれば、それは舟泊りとなり、舟旅にあきた気持ちや旅の不安にとって、そのように「心恋しき」ものはない。「心恋しき」が実に合理的に説明される。「湖」は「島」の合理化の産物と考えずに、茂吉は「可古の島」は「可古の湖」とも歌いかえられた故に、現実においても同一の場所を指したものと考えたのであろう。(たとえそうであっても、そのことで歌語の役割を決定することは出来ないが。)そこで「稲日野も行き過ぎかてに」まで、その解釈の合理性を遡及させて、『舟旅が進まないのに倦んで、もの思いにふけっていると待ち望んでいた上陸地が見えてきた』の意に解したのである。

しかし人麿が第一としたのはあくまでも「島」であって、「島」といわなければならなかったのである。「心恋しき島」といわれる程の島は隠妻伝説にいう「南毗都麻嶋」であると考える他はない。風土記の記載その他から判断して「可古の島」を賀古川河口の島とすれば、「可古の島」は「南毗都麻嶋」となるといわれて(注12)

いる。これには反論もあって一概には云えないようだが、とにかく地理的判断の上でも「可古の島」は「南毗都麻嶋」と云い得る。

では人麿が、印南の別嬢の伝説の島を他の歌人達のように印南都麻と詠んで、何故「印南都麻見ゆ」としなかったかという疑問が当然浮んでこよう。それは第一に、既に「稲日野も行き過ぎかてに思へれば」の句に、隠妻伝説への追憶とそれから引き起された妻への思いが充分にこめられている故、今更「つま」を詠み込む必要がなかったこと。第二に、音韻上「稲日野」「印南（稲日）都麻」と繰り返しがくどくなること。第三には「心恋しき」というK音とO音の連続に「可古」が調子良く続くこと。この三点から「印南都麻」ではなく「可古」が選ばれ、「南毗都麻嶋」の「島」を生かしたかった故に「可古の島」と続けたのである。

ところで「可古」という言葉そのものにも「心恋しき」といわれるだけの理由があるのではなかろうか。荒木田久老が「可古」は「吾児（あこ）」の間違いだとしたのも、「心恋しき」といわれる理由を「吾児」とすることで満たそうとしたからであるが、これは今更云々する必要もあるまい。しかし久老が考えついたように「可古」の「古」は、子供や恋しい女を意味する「子」に音の上で通ずる。このことを踏まえて「心にも恋しい児という名を持つ可古の州影」が見えて来たと荒木良雄氏は解しておられる。その根拠として「鹿児じものわが独子の」(790)「鹿児じものただ独りして朝戸出の愛しきわが子」（4408）の句を示されている。[注13] これはもっともと思われる節がある。と云うのは人麿には「未通女等が袖布留山」（501）のように地名を掛け詞とする技法があるからである。

しかし「鹿児じもの」の例は集中僅かに右の二例にすぎない。しかもそれはいづれも一人子の自分の子供を引き出す序に使用されている。従ってこれは「鹿児」だけでは意味をなさないので、「独り」という言葉がついて初めて『鹿の子のように唯一人の』となるのである。「カコ」だけでは『一人子』の映像を充分に想像させることは出来ないことになる。その上、この「鹿児じもの」の二例はいずれも天平時代の作という詞書を持って居り、その頃にならないとこうした鹿の子の独り子のように独り子をいとしいものとする文学的知識が生まれて来なかったのではないか。それ故人麿の「可古」に子供の意味があったというのは極めて疑わしい。だが荒木氏は別の箇所で、また「可古」は「彼の子」つまり「あの子」であると云われている。[注14] これは全くその通りであろう。ただ氏は前記の理由であの子はやはり子供であるとされているのが無理のようである。彼の子は隠妻伝説の連想から見てもいとしい女性のことであろう。

「可古の島」は印南都麻でありながら、音韻その他の理由で「可古の島」となり、その上に「心恋しき彼の子」と恋しい妻の意が掛けられているのである。この幾重にも重なった人麿の連想作用は万葉にこれを除いて「可古の島」が一例もないことでも肯けることではなかろうか。

「可古の島」をこのように解すれば、既に契沖が指摘しているように、「稲日野も」と人麿がいわなければならなかった理由をも説明する事が出来るのである。[注15] この「も」は云うまでもなく詠歎の「も」であるが、そうは云っても裏には何か「稲日野」と同

様な内容を持ったものとの比較があって、初めて「も」と詠歎されたのであろう。そうでなければ他の詠歎を表わす語に置き換えて差し支えない筈である。そうすると契沖の云うように「稲日野」と併置されたのは「可古の島」ということになる。前述の如く「稲日野」には隠妻伝説があって、作者は心惹かれているし、「可古の島」は「彼子」から作者の妻への慕情が引き出されている。両者は「心恋しき」の点で一致するものである。

さて、以上の解によって「思えれば」以下を強いて口訳すれば『なんとはなしに通り過ぎてしまいたくないと思っていると、その思いがかなってかあの子、恋しい人が見えたといってよいかのように伝説にも懐しい南毗都麻という可古の島が見えてきたことよ。』という所であろうか。

五

こうした連想によって文学するということは日本文学の特質と云えるが、人麿のこの歌においては、その点が特に顕著である。記紀に見られるような従来の連想作用は単線的に次へ移るだけで、つまり第一の映像は第二の映像を生みはするが、両者の感覚的統一性は無視されがちであった。人麿の長歌においてもこの傾向がある。云いかえれば、ひとつの表現目的に向って両者が緊密に協同することが無かったのである。この歌ひとつの分析をもって断定することは危険であろうが、それが人麿によって或るひとつの作品全体の効果を高めるため、それぞれの部分が相互に緊密に作用し合うものとされたのである。これは歌語としての言葉の効用に新しい局面を開いたと云える。印南野に、そこを舞台にした印南の別嬢の故事の追憶をこめ、その物語の愛妻（はし）への慕情と作者の旅愁が化合して生んだ作者自身の妻への思い、それが「心恋しき」という句を引き出し、「心恋しき」故に「彼の子」という言葉が導かれてくる。それは同時に伝説の主人公印南の別嬢そのものとも云える「可古の島」にも一致し、その南毗都麻島の出現は、「稲日野」における物語への追憶にも相呼応してくるという複雑な仕組みになっている。この連想の特質を理解しないと、この歌は解りにくい下手な歌であるということになってくるのである。(注16)

ところでこの「可古」・「彼の子」を、遣新羅使の歌やその他で伝説の主人公を「吾妹子」と呼んだように、隠妻伝説の主人公印南の別嬢を指したと云うことも出来るかも知れない。しかしそれではこの歌が伝説への追憶一色となってしまう。巻三の羇旅八首を見ると旅愁が共通の主題であることが知られる。純粋叙景歌と云えるものもあるが、それさえも底には旅愁を秘めているので、この一首を例外的に物語への追憶だけとは解せない。

251淡路の野島が崎の浜風に妹が結びし紐吹きかえす

右の歌に、家郷に残した妻への思いが表われていることでも、この「稲日野も」の歌に家郷の妻への思いがあっても当然である。

人麿のこの歌は、隠妻伝説への追憶を契機として発想され、その物語の情緒を自己の内心に化合させ、そのことで家郷に残した妻への思いというありふれた題材を味わい深いものに仕上げている。この点、単に物語に対する感想を述べただけの歌とは大いに異なるところである。人麿のこうした手腕が、抒情の質を豊富に

且つ多面的なものとし、自己表白の魅力故に興隆しつつあった古代抒情詩の領域を拡げたのである。それは前述の如く、以後の歌人達がこの印南野の与える連想作用を利用していることからも判明しよう。儀式・信仰・物語等に依存し制約されつつ成長して来た抒情詩がこの段階に至って、決定的に独立したと云えよう。

人麿が物語の情緒を歌の世界に消化したことは次の歌

252荒栲の藤江が浦に鱸釣る泉郎とか見らむ旅行くわれを

が貴種流離の歌語りの断片といわれる巻一の麻続王が流された時の歌

24打ち麻を麻続王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります

を受けていることでも知る事が出来る。(注17) 猶附言すれば、この一群の羇旅歌は東上・西下いずれの際の作かという事がしばしば問題とされて来たが、251・252の配列などは「野島の海人」の連想によるとも思われる。

こうした新しい歌の作り出されたその背後には――例えば歌舞する者共を宮中に集めたとか、旧事の誦唱、撰善言司の設立、人麿の公的挽歌の要請等にうかがうことが出来る――天武から持統・文武朝にかけての文運興隆と云おうか、気運の力が大きく作用していたと考えられるのである。

注1 詞書は「大神大夫(おほみわのまへつきみ)の筑紫国に任けらえし時に、阿倍大夫の作る歌一首」となっている。「大神大夫」は前歌の詞書と同じく高市麿と云うことになろう。彼は壬申の乱に功績があった人物で、人麿より年長である。従って歌は必ずしも人麿以後とは云えなくなる。しかし、沢瀉博士（万葉集注釈）も「……筑紫へ任官の事が見えない。童蒙抄には『長門守にて下る時の事なるべし』とあるが、……それは春の事であり、歌には『秋萩見つゝ』とあって、合はない。」と云われる如く、この詞書は極めて疑わしい。従って今、印南野の用法から推して人麿以後のものとしてよいと思われる。猶「子」を男子とする説もあるが、この場合女性でなければならない。

2 花田比露思「万葉集について」――「中大兄の印南国原の御歌によって予て懐かしく思っている印南野、その印南野をうっかり素通りしたくないと思へるからして」（沢瀉久孝「万葉集注釈巻三」の引用による。）

3 荒木良雄「播磨の文学」――「十一、稲日都麻・印南野考」93頁参照

4 古典文学大系万葉集(四)58頁

5 例歌二首

47ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し

636わが衣形見に奉る敷栲の枕を離けず巻きてさ寝ませ

6 「万葉集略解」――「歌の意は、故郷の方の印南をだに妹が形見と見んを、立つ浪のよそに成りたるを歎くなり。」

7 前者の解を採るのは代匠記・考標・攷証・檜嬬手・略解・古義・新考・評釈・私注・注釈であり、後者は全註釈・柿本人麿評釈篇等である。

8 例歌二首

1177若狭なる三方の海の浜清みい往き還らひ見れど飽かぬかも

1187網引する海子とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に来しわれ

を

9 たとえば例外的に次のような歌がある。

1190 舟泊(はて)てて牧柯(かし)振り立てて廬せむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも

この歌も勝景を賞するのあまりと解されて来た。しかし「名古江」の地名から思われるような、海面のおだやかな入江での旅人や舟人の休憩の宴で興に乗った際の歌のように思われる。そこに土地の女など登場していた場合が想像される。そうすれば「過ぎかてぬかも」は女共への戯れと解される。そのように解するより仕方がない歌であり、抒情詩としては未熟な、完成度の低い、まだ場に依存しきった歌と云えよう。

10 荒木良雄氏は前掲書99頁その他において、人麿のこの歌に家郷・妻を憶う心を認めておられるが、それが何によって触発されたものであるかまでは言及されていない。

11 斎藤茂吉「柿本人麿評釈篇巻之上」—「『行き過ぎがてにオモへれば』と続くのかと思ってゐた。つまり『過ぎ難いやうに思ふ』といふやうに考へたこともあったが、これはさうでなく『行過敢へずにゐて、モノ思ヒヲルニ』といふことになり、……」

12 大日本地名辞書「蓋印南川の河口なる推洲にして、中世以降高砂と云ふ者是なり、可古の島と曰へるも又此ならん」、その他これにならう説が多い。

13 荒木田久老「万葉考槻落葉」—「誰もおもふめれど、心に恋しむかことといふことの、あるべくもあらねば、可古は必阿古の誤なるべくおもひて、私に改う。さて阿古は、吾児の意によみなしたり。」

荒木良雄 前掲書100頁

14 同右「十五、人麿のいる風景」—「『かこのしま』と云ったのに、いままで思いつづけていた家郷の『彼の子』を、強く連想した。……人麿の連想したのは、まさにこの『鹿児じもの、わがひとり子』であった。『かこのしま』と聞いた刹那に、そのおもいは、ただちに恋しくなつかしく思いつづけていた、わがひとり子の上に飛んだのである。」

15 代匠記「稲日野をといはずして野もといへるは可古の島も見ゆと云ふ心を兼ねたり。」

16 武田祐吉「万葉集全註釈」—「表現が不十分の感があって明快な印象を与えない。心恋シキの一句に、作者の意図するところが十分にあらわれていないのである。」

17 麻続王の歌は、歌語りにおける聴き手の主人公に対する気持ちを代弁した歌である。「海人なれや」というところに哀れな境遇に身を落した流離の貴人に対する同情がこめられている。その海人に擬らえられた主人公の位置に身を置いて見ることで、人麿の「泉郎とか見らむ」は発想されている。哀れな境涯に身を落して旅を続ける貴人の悲しみを自己の旅愁として、甘美な情緒を味わっているのである。文学的享楽とはそうしたものであろう。勿論人麿は官命で旅をしたのだが政治的左遷の運命の悲哀を楽しんでみたのである。「泉郎とか見らむ」には長い伝承に培われた「あま」にまつわる悲愁の文学がふまえられている。